

出題のねらい

㊦は小説『美貌の女帝』（永井路子著）からの出題です。歴史上の事件や実在の人物を素材として書かれた小説を「歴史小説」と呼びますが、その歴史の中でも、今回は「古代史小説」とも呼べる古い時代を扱っています。主人公の氷高皇女（元正天皇）の活躍した時代は奈良時代、平城京の時代です。氷高皇女は母親の阿閉皇女（元明天皇）から36歳で天皇の位を譲り受けました。従来の子が妻や母であったことからすると、異例の、若い未婚の女帝の誕生です。女性としての幸せを犠牲にし、すべてを政治に捧げたのは何故か、そこに迫る小説が『美貌の女帝』です。この小説の一節から、今回の出題は、祖母持統天皇、母元明天皇、そして、主人公の兄弟たちの描かれ方を読み取るものでした。出題内容としては、漢字や登場人物たちの系図完成、言葉の意味や登場人物の性格を説明する問題、助動詞の意味、文学史など、幅広く問いました。

㊦は論理的文章です。論理的ではあるけれど、長い修飾語を持つ文が多いこと、歯に衣着せぬ物言いと皮肉が諸処に混じることなどから、筆者の意図をつかむのに難渋した受験生もいるかもしれません。普段からさまざまなタイプの文章に親しんでいることが必要ですが、あわせて指示の言葉が何をさしているのかを丁寧に押えながら読むことを心がけるとよいでしょう。出題内容としては、筆者の考えを読み取ることを中心に、ことわざ・四字熟語・文学史などの問題も交えました。



【解答】(50点)

問一	a 高貴	b 眉根	c 目下	
	d 頑	e 一計		(各2点×5)
問二	a 草壁	b 持統	c 氷高	
	d 吉備	e 阿閉		(各2点×5)
問三	ア 可能	イ 受身	ウ 受身	エ 尊敬
				(各2点×4)
問四	A 耳	B 品		(各1点×2)
問五	人々がひめみこの美貌と結婚について			
	話題にするとき。(3点)			
問六	(1) 6	(2) エ		(各2点×2)
問七	持統天皇の、寡黙冷静で、			
	度胸のよい様子。(3点)			
問八	i カ	ii ク	iii ウ	iv キ
	(各1点×4)			
問九	持統天皇の、氷高と吉備という			
	二人の孫への深い愛情。(4点)			
問十	エ (2点)			

【解説】

問一 漢字の書き取り問題。正答率はどれもあまり高くなく、aは8割ほどでしたが、bは「根」が合わず、c、d、eについては3割程度しかありませんでした。漢字の書き取りは必ず出す問題ですので、日常から新聞等を読む習慣をつけ、様々な漢字に触れておいてください。

問二 家系図の完成問題。人間関係を把握してそれを図に変換するのは、少し技術の要る作業ですが、よくできていました。

問三 助動詞の意味を問う問題。完答率は6割ほどでした。文脈的にイ・ウが受身であり、エが尊敬であることは問題ないところでしょう。ただアを可能とすることについては説明が必要となります。「感じられる」「思われる」「考えられる」「(と)見られる」などとともに「自発」とされるものです。ただ、「感じられない」と否定形であることにより、「予想した事態に反する」というニュアンスが生まれ、語句全体として事態の成立不可能の意味が生じます。選択肢では自発を入れていませんので、文脈の意味を優先して可能を選ぶこととなります。普段使う現代語の、文法にも興味を持ってほしいと思います。

問四 ことわざの問題。Aの「耳」はよくできていましたが、Bの「手をかえ『品』をかえ」の方はほとんどできていませんでした。意味は、「あれこれと方法を替えること」です。新聞のコラムなど、ことわざについて書かれている文章を積極的に読み、知らない表現があったらすぐに調べる習慣を身につけましょう。

問五 内容説明問題。美しい氷高皇女の、何を母は不安に思っているかを問う問題でした。よくできていました。母の元正天皇は、氷高皇女だけでなく、妹の吉備についても、その結婚相手について、人々が話題にするのを嫌っています。傍線部だけでなく、その前後の文章を読んで、内容を把握しましょう。

問六 内容説明問題。吉備皇女の年齢と性格についての問題。吉備の初乗馬の年齢については6割程度の正答率でした。2年前から強引に乗馬を始め、今は8歳なので、正解は6歳です。(2)の馬に乗りたがる吉備についての説明問題は、よくできていましたが、「不適當なもの」を選ぶという形式に気づけなかった人は、時間を浪費してしまったかもしれません。

公募制推薦入試／国語(後期)

問七 内容説明問題。持統天皇の様子を問う問題で、記述式にし、「深沈」「大度」といった熟語がどのような意味で用いられているかを自分の言葉で説明してもらいました。書くことで自分の理解を示す作業は大学に於いても非常に大切な能力となります。受験生の間に、書く事を嫌がらず、表現力を磨くよう心がけましょう。

問八 心情説明問題。吉備皇女の発する二度の「お祖母さま」という言葉に込められた気持ちについての問題でした。よくできていました。

問九 心情説明問題。無口だと言われる持統女帝の、二人の孫娘に向ける視線に込められた愛情をまとめる問題でした。「水高と吉備への」「深い愛情」が書いていたら得点できたので、記述問題にしても取り組みやすかったようで、よくできていました。

問十 文学史の問題。『天平の甍 (いらか)』は1957年、中央公論社から出版された井上靖氏の著作、『坂の上の雲』は産経新聞で1968年から連載された司馬遼太郎氏の著作、『村上海賊の娘』は週刊新潮に2001年から連載された和田竜氏の著作、江戸時代初期の殉死を扱った『阿部一族』は、1913年に中央公論で紹介された森鷗外氏の著作で、いずれも歴史小説ですが、『斜陽』は、1947年、没落する人々を書いた太宰治の小説で、歴史上の事件や実在人物を描いたものではないので、これが正解でした。正答率は5割程度でした。日本の文学を学ぶときに、その流れを知る事は大切です。是非、文学史もしっかりと身につけていきましょう。



【解 答】(50点)

問一	a 圧縮 b 報告 c 公表 d 従事 e 展開	(各2点×5)
問二	A 一葉 B えくぼ	(各3点×2)
問三	ア	(3点)
問四	文学も小説もまず商品だから。	(3点)
問五	(i) 営業妨害 (ii) 余計な地図	(各3点×2)
問六	ウ	(3点)
問七	I オ II ア	(各3点×2)
問八	百年経っても読者が相当数いるということ その読者の質が低いということ。	(4点)
問九	(i) イ (ii) エ	(各3点×2)
問十	ウ	(3点)

【解 説】

問一 書き取り問題は、全体として7割程度の出来でした。特に a圧縮・b報告はよくできていました。

問二 Aは文学史の問題です。よくできていました。Bは「あばたもえくぼ」ということわざを完成させる問題です。意味は「好きなものはその欠点も美点に見える」ということです。「魅力」という答えが多かったので、意味は理解しているのですが、「えくぼ」というのはほとんど見られませんでした。

問三 四字熟語の意味を問う問題です。よくできていました。

問四 6割程度の出来でした。「なぜだろうと考えてこのたび結論を得た」の答えは、その後続く「それは、(略)従って文学小説もまず商品だから(略)」の部分になります。十五字以内の抜き出しなので、下線の部分(十三字)を抜き出せばよいことになります。「それは」が何を指しているかがわかれば解ける問題です。

問五 文脈を読み取る問題です。「他人の商品にケチをつける」とは、(i) 売り手に対しては「営業妨害」になるという抜き出しは9割の人が出来ていました。ただ、抜き出しにもかかわらず例えば妨害を妨害とするなど不注意な誤字がありました。誤字はすべて減点の対象となります。一方、(ii) の買い手(読者)に対しては、「余計な指図」をすることになるのですが、これは4割程度の出来でした。文章がストレートには続いているので読み取りが難しかったのだろうと思います。誤答としては、「個人の嗜好」「人間の偏見」などがありました。しかし、前者は「蓼喰う虫も好き好き」の言い換えにすぎませんし、何より本文中にないので抜き出しとは言えません。後者は「他人の商品にケチをつけること」の言い換えにはなるのですが、読者に対して何をするようになるのかという答えにはなっていません。

問六 文脈理解の問題です。半分ほどの出来でした。「蓼喰う人」がどのような人かは、その後続く「ある鑑定人が重大な欠陥であると指摘するものが読者には魅力の根源であったりする」と「蓼喰う虫も好き好き」ということわざの意味とを併せて考える必要があります。誤答としてはエが多かったようですが、エは「評価されない物にこそ」とある点で選択からははずれます。「蓼喰う人」にとって重要なのは自分の好みであって、対象が評価されているか否かということは重要ではないからです。

問七 文脈理解の問題です。I II両方の正解者は半分ほどでした。Iの誤答としてはウが多かったようです。評論家と対にするためにウ「読者」を選択したのでしょうか。しかし、その後続く文には「よく売れているものは市場が『よい』と判定したものであるから」とありますので、ここはオ「市場」が答えになります。IIにはア「絶対」が入ります。その前の行の「相対主義の季節」とは、「IIの物差しなどあり得ないかのような顔をする」ことと同義だからですし、「そんなIIの物差し」の「そんな」は「駄目なものは駄目という」ことを指していますから、IIの物差しは「絶対」的なものになります。

問八 文脈理解の問題です。ここでは直前にある二つの条件をあげなければなりません。一つは「百年経っても相当数の読者がいる」ということと、もう一つは「その読者の質が低くない」ということです。二つが書けて4点、一つでは半分の2点です。前者の条件の方だけを書いているものが多くありました。四十字という指定ですからほぼ抜き出しのような問題になります。

問九 二つの気の減入る対象を読み解く問題です。(i)(ii) 完答は6割ほどでした。(i)の「気を減入らせる」主語は、「今日市場で～その頃(百年後)読まれるものが皆無であったとすれば、という想像」ですから、それは現在の小説に質の良いものがないということの意味します。誤答としてはアが多かったのですが、p.9～10の2行目あたりで、すでに市場が好むものは「よい」ものだということを前提にして話をすすめているので、ここではアではありません。(ii)で「気が減入る」のは、同じ文の「これは」が指示するもの、つまり「その時々市場で消化されて女子供を楽しませる以上のものでありえないということ」です。ですから答えはエになります。(i)では今日(1970年頃)の小説の質を憂慮しているのですが、(ii)では、小説の本質や価値にかかわることを問題にしているのです。

問十 筆者の主張を読み取る問題です。正答率は6割ほどでした。主張として「ふさわしくない」のはウです。ウは、もしかすると筆者の理想かもしれません。しかし、本文中のどこにも、読者は鑑定人である批評家の意見を尊重しなければならないとは書いていません。筆者の主張は、まずなぜ批評というものになくなったのかについてであり、その答えは、文学や小説が商品だからだということです。商品だからまともな批評をして営業妨害をしてはいけないし、自分でお金を出して自分の好きなものを買おうと

している読者に、それは駄目だと余計な指図をするのも筋が違う。だから、まともな批評というものが存在しなくなるというのです。では、一体何をもって作品の善し悪しを判定すればいいのかというと、それはたとえば質の低くない相当数の読者によって百年経っても読まれている作品だということです。しかし、それでも筆者の危惧はやみません。今日市場で喜ばれている作品が百年後どれだけ残っているのだろうか。いやそもそも小説とは本来その場限りの楽しみごと以上のものではないのではないかなどと「気の減入る」ことばかり考えてしまうのです。